

續蒸餾法に改むる計畫を立て、大正四年一月、製油技師長高野新一氏を露國に派して、彼地に於ける實際の狀況を視察せしめ、四月高野氏歸りて、其調査の結果を齎すや、直に露國技師アルシャーウイ、ガスバリアン氏を聘し、其設計に基きて秋田製油所の一部を露國式の連續蒸餾に改め、其工事は大正四年の末に至りて完し、之に依り同所の原油蒸餾力は大に増加したのである。

波瀾多かりし寶田石油會社

池田氏去り福島氏入る

曩に松原重榮氏に代り、寶田石油會社に入り専務取締役に就任したる、池田寅次郎氏は、大正四年の春、郷里岡山縣より代議士に選出せられたるを以て、取締役に辭することとなり。東京瓦斯會社の取締役たりし福島甲子三氏が、代りに同社の専務取締役となつた。

長岡鐵工所の隱匿金事件

福島氏が就任してより數ヶ月の後、端なくも一事件が突發した。是は長岡鐵工所の利益金隱匿問題であるが、其事件の大體は、越

後長岡市に在りて、渡邊嘉政氏を取締役會長に、井口庄藏氏を専務取締役に、其他寶田石油會社の重役若くは關係者を取締役若くは監査役に舉げて居る株式會社長岡鐵工所の役員が、決算報告を詐り、十九萬餘圓を隱匿して居るとて、同市より發行する越佐新報紙上に、六月十三日より同二十日に亘る間に於て、可なり詳細に報道せられた。そして其隱匿の主なる點は、固定財産、材料、消耗品、製品、半製品等の計算を實際より少く報告したるのみならず、預金總額九萬一千三百九十圓あるを、一萬二千三百九十圓と報告し、預金のみにて七萬九千圓を隱匿したりといふのである。

餘波寶田に及ぶ

長岡鐵工所は資本金八萬圓にして其株主十餘名で、總株式數一千六百株の内寶田石油會社の所有するもの約五百株であれば、購買上の關係と云ひ、此出資者たる關係と云ひ、寶田として之を放任する譯に行かず、直に重役會議を開き、鐵工所の計算上に就て調査することにした、此時寶田を代表して調査及び交渉に當つたのは、福島専務で此事より同じ専務の渡邊藤吉氏と反目することとなり、延て他の重役も亦二派に分れ、本元の長鐵よりは、寶田の騒ぎの方が甚しくなり、渡邊氏に對し他の重役一同より辭任を勸告したが、渡邊氏は之を肯じな

つたので、遂に専務を解任するに至つた。

斯くて明治三十二年以來、寶田に入りて専務の任に在つた渡邊氏は、取締役としての名目は存するも、實權と離るゝこととなり、同社の紛紜も一と先解決を告げたのである。此事ありて二ヶ月の後、同社にては支配人小秋元三八吉氏、機械課長前田復三氏以下三十餘名の社員を罷免した。

二千萬圓に増資

同社は此時まで千五百萬圓の資本金の所、將來各方面に試掘して事業の發展を計る必要上、十二月の重役會に於て、資本金を二千萬圓に増加することに内定し、翌年一月臨時株主總會を開いて之を決定した。

山田又七氏去る

社長山田又七氏は、明治廿六年同社創立以來經營の衝に當つて居たのであるが、前項長岡鐵工所事件より重役間の紛争を來し、旁々近來病氣勝なので、渡邊氏が解任せらるゝに先ち、社長の任を辭し、尙大正五年一月の臨時總會に於て取締役をも辭した。

橋本圭三郎氏社長に就任す

前項の如く山田又七氏が辭したるにより後任社長として、前大

藏次官橋本圭三郎氏就任することとなつた。橋本氏就任後間もなく、同社總務部長に長松爲次郎氏、鑿井部長に松田繁氏、製油部長に水田政吉氏が就任した。

大正五年

(1916)

■墨西哥セラアズルに於て三十萬バレルの巨井出づ
■米國原油價格昂騰す
■羅馬尼亞田獨軍の手に歸す
■揮發油の激増に連れクラッキンクによるガソリン製出法リトマン博士等により案出さる

日石新油田大面の噴油

地勢及沿革

新油田大面は新潟縣南蒲原郡に在り。三條町の東南二里に位し、信越線帶織驛を東に距ること約二十町。東山山脈の西麓に起伏連亘する丘陵地帯で、上部は第三紀層より成り、大凡南北に走れる一條の背斜軸ありて、其延長四哩に達して居ると稱せられて居る。此地に石油存在の知られたるは可なり、古い事であつて、文政年間、大面村大字北湯の彌兵衛といふものが、田地開墾の際、原油の露出に逢ひ、之を薬に浸して採收し、燈火用に供したと傳へられ、當時一

日三四升位を得たといふ。其後に至り、一の木戸村宇田島の何某といふ者、手堀井を試み、深度四、五十間にて日産一斗位を得、下りて明治十年に、北潟の人島影九郎及び大澤鐵藏の兩氏手堀にて四十間に達し日産二斗を得しも出水の爲め廢坑し、明治廿五年北潟の小室面之、山本多藏の兩氏等主唱にて北洲石油組合を組織し、手堀を試み、多少の油を見しも同じく出水の爲め廢坑し、明治廿六年山本多藏、大澤鐵藏氏等上總掘にて深度百三十間餘に達し、其間數回油を見たるも蹉跌し、明治二十八年藏王石油會社が、機械網掘にて百七八十間の所に達したるも出油を見ずして廢坑し。明治三十三年、大面の人岡村嘉一郎氏外數名の主唱にて大見石油組合を設け、上總掘にて深さ百二十間餘に達し、此間油を見たるも水止め不完全の爲め廢坑し、明治三十五年、國光石油組合にて機械網掘をなし、百三十間に達し、日産五斗の油を見たるも資金缺乏の爲め廢坑し、明治三十六年、見附鑛業組合にて同じ機械網掘をなし、二百餘間に達し日産約一石ありしも水止不完全の爲め廢坑し、明治四十一年關矢代作氏上總掘にて五十餘間に達し、多少の油を見しも資金缺乏の爲め事業を擲つこととなつた。

二號井噴油

日本石油會社大面鑛區は、イントル石油會社買收の際、其所有に歸したるものに、

漸次買集めて附近一帯の統一を期し、其成るを待ち、開掘に着手したるは、大正三年

二月にして、掘進四百十四間に達し、其間一二の油層に達着したるも、鐵管の故障の爲め廢坑し、大正四年九月二號井を開掘し、大正五年五月九日深度四百七十五間にて豊富なる油層に達着した。噴油當時は一時間二十石以上の割合であつたが、坑底より細砂を原油と共に噴上げて時々閉塞し、其都度之を浚渫しなければならぬので、日産は其割合には行かず、三百五十石前後であつた。同坑は此出油に對し、直に土タンクを急造し、又附近の町村より酒樽を買集め、人肩によりて之を帶織驛に送り同驛より油槽車を以て柏崎製油所へ送ることにしたが、一方には八千石の鑛槽を大面油田に急造し、又三吋の鐵管線を大面、帶織間に敷設した。此二號井は其後坑底より噴上げる油砂の爲め浚渫器押へられ、久しく閉塞して居つたが、數ヶ月にして舊態に復することを得た。同社は尙引續き開掘し、三號井は大正五年十一月に成功し數十石の油を見た。

秋田に於ける新出油地

槻の木方面

黒川の大噴油に刺戟せられて、秋田縣の各所に掘鑿を試むるを生じ、其結果として一二の新出油地が現はれた、其第一は槻の木方面で、是れは大久保油帯に屬し、南秋田郡豊川村地内に屬し、大久保驛から僅に半里程を距るのみである。同方面は從來中外アスファルト會社の根據地で、同社は多年此所で石油とアスファルトを採收して居たのであるから、全くの新油田とは謂ふことを得ぬが、其俄に現はれるに至つたのは、小倉石油部のロータリー一號井が、大正六年八月、深度百三間の深層に於て、日産三百石といふ好成績を收めてからのことで、此方面は中外、小倉の外、中野興業、日本石油等の鑛區があるので、忽にして境界戦が演ぜられるやうになつた。之に關し「秋田魁新報」は十月十七日の紙上に左の如く報じた。

小倉石油部が南秋田郡豊川村槻の木に日産三百石のロ式一號井を出したるより、大久保方面は斯業界の注目を惹起すること多大にして、何れの會社も出來得る丈け速に新鑿井を試み採油せんとする傾向あり。蓋し此方面に於ける鑛區は現に着手しつゝあるもの中外石油アスファルト會社、日本アスファルト會社、中野興業會社、小倉石油部等にして、日本石油會社も亦之を所有するのみならず、其他個人の權利に屬する分も少なからざる

ど、所謂犬牙錯綜の觀あれば、旁々早いもの勝の有様となれる爲め、日本石油も更に槻の木にロ式第一號井を試むべく目下準備中なる故、大久保方面の油田は眞に混戦の姿を呈するに至れり。

浦山方面

浦山油田は秋田縣南秋田郡金足村大字浦山地内に在りて、其油帯は黒川油帯と並行し、其間一里の距離を保て居り、同方面の鑛區は主として日本石油會社の所有に係り、同社は大正四年の一月始めて着手し、數井の試掘を得て大正五年十月に至り、ロータリー三號井が二百四十五間にて約百石の出油をなし、其前途の有望なることを證明した。

朝香宮殿下及久邇宮殿下の石油地御視察

朝香宮殿下

朝香宮鳩彦王殿下には、御附武官縣知事等を隨へ、八月十六日の夕刻新潟縣柏崎町に御着あり、同町にて御一泊の上、翌十七日午前日本石油會社柏崎製油所に御成り、蒸餾釜、ポンプ室、洗滌槽、機械油洗滌場、製罐工場、荷造場、倉庫、ホーム等を臺覽あらせられて後、西山油田に向はせられ、日本石油會社長嶺二十四號井のロータリー鑿井作業、二十二號井の綱掘り、

二十一號井の採油作業、及びガソリンプラント並に寶田石油會社のガソリンプラント等に就き仔細に御視察あり。午後一時十分西山發の列車にて新潟へ向はせられた。

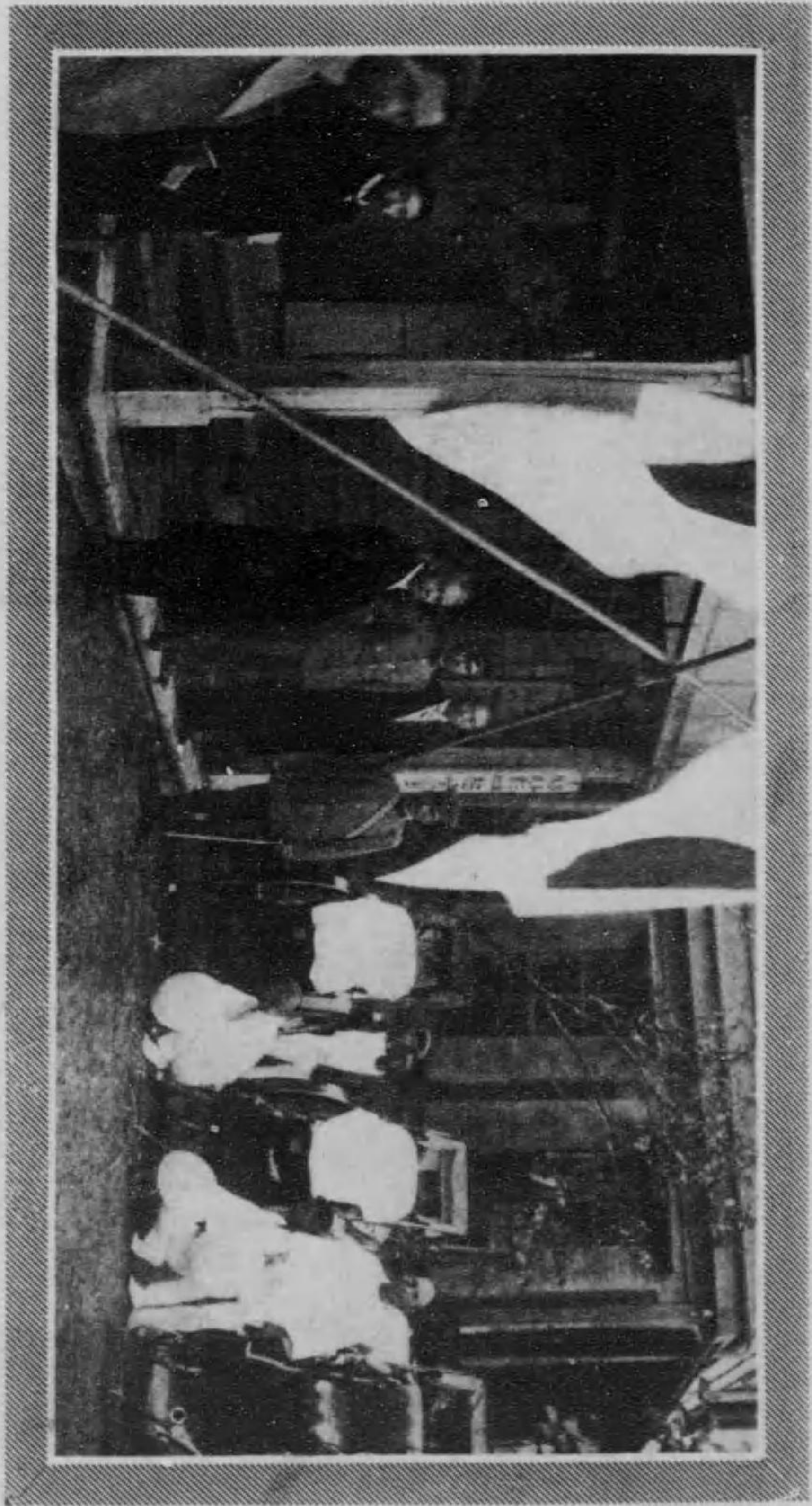
久邇若宮殿下

久邇若宮朝融王殿下には、宮内事務官外數名を隨へ、八月一日午前日本石油會社黒川油田へ御見學の爲め御成りあり、十六號井自噴の状態、五十五號井のロータリー掘鑿作業、十一號井のボイラーに瓦斯燃焼の實況及び送油大ポンプ等を又午後には土崎なる同社秋田製油所に就き、單獨蒸餾及び連續蒸餾の光景、洗滌槽、荷造場、製罐場等を臺覽あらせられた。

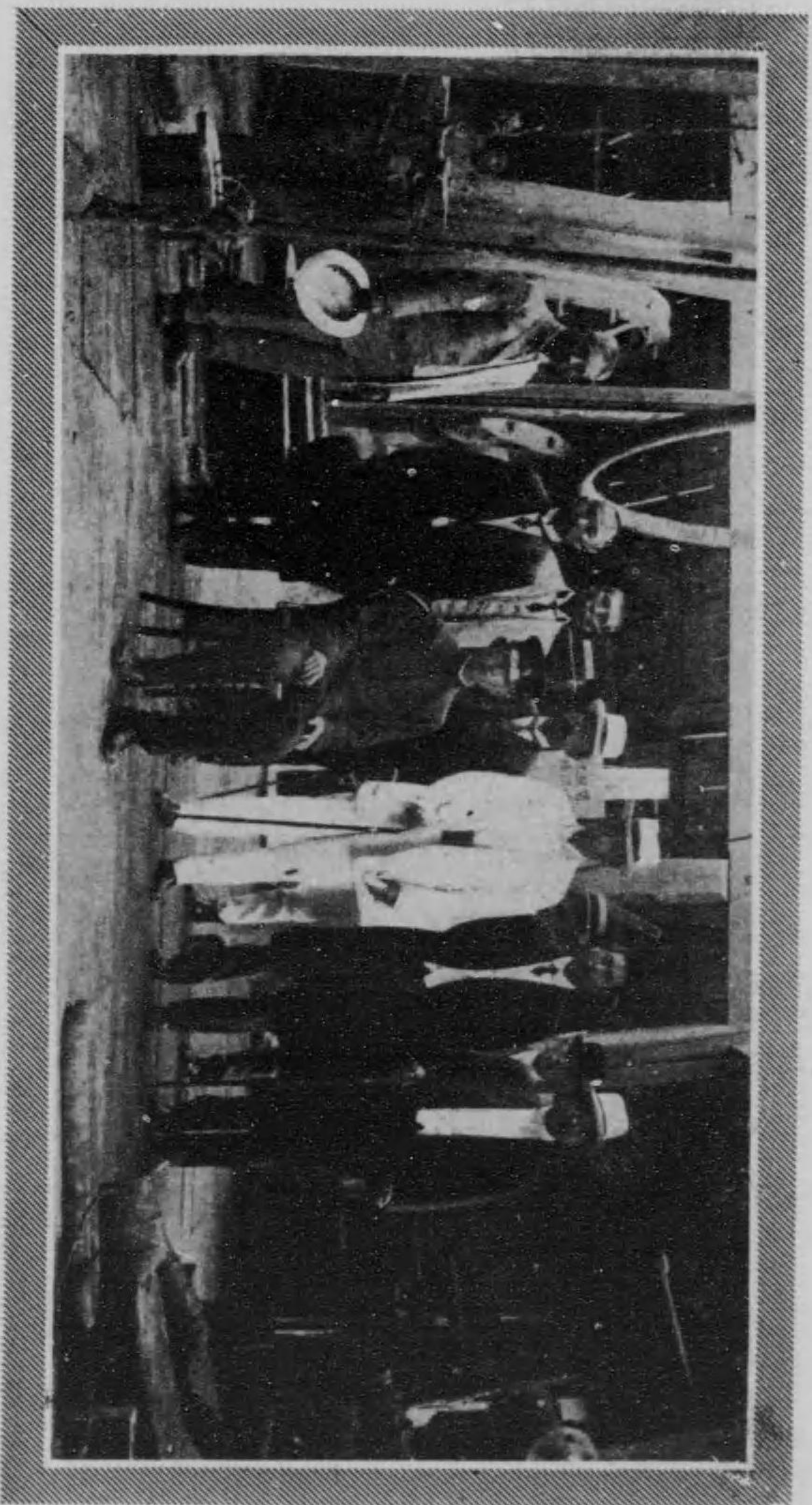
資産家指を石油に染む

從來石油業は、石油鑛業を目的とする會社又は、地方的に之に携はる個人の外、世人に顧みられなかつたのであるが、近年に至り、資産家が之に指を染むるやうになつた。之に就て大正四年九月大坂朝日新聞は左の如く報じた。

從來石油の採掘精製業は、日本、寶田の二會社を初め重に越後地方の經營する所に係り、一般世人は多く顧る



久邇御所油製時柏社會油石木日下殿宮香朝



久原宮下秋田油川田御祝祭

所なかりしが、近年に及び資産家は石油事業に着目するに至り、殊に昨年日本石油の秋田黒川大噴油以來地方人の石油熱を刺戟せしのみならず、一層資産家の注意を惹き、村井吉兵衛氏は、先年來北海道に於て巨大の石油鑛區を買取り、北見國稚内附近及び日高の沙流方面にて試掘に着手し、自ら經營に着手せしが、更に近時に及び天鹽國天鹽川沿岸にても石油試掘に着手するに至り。又大阪の久原鑛業事務所、東京の高田商會の如き何れも北海道、青森、山形、新潟各縣の有望なる石油鑛區の領有を望み、既に少なからざる權利を獲得し、目下精細なる調査中にして、進んで大規模の石油採掘に従事せんとする方針に在るが如し。要するに資産家が漸次石油事業を經營せんとするに至りしは、我國石油界の新現象といふべきが、畢竟斯の如きは石油の用途大に開け前途有望なると、近時内地資産家が適當なる放資物件の缺乏に苦しめる結果に外ならざるが、兎に角注目すべき現象といふべし。

久原鑛業

石油界に指を染めたる日淺きに拘らず最も眼覺しく立働いたものは久原鑛業である。先づ新潟縣刈羽郡高柳村山中に地を卜し、大正五年一月、ロータリーの機械据付を了り、三月開掘し、七月には同縣三島郡與板町本與板に綱掘を以て着手し、其他秋田縣に在りては秋田市外雄物川沿岸にロータリーを以て開掘し、北海道に在りては天鹽國苫前郡築別及び天鹽郡茂歌越別

に開掘した。此等の鑿井は何れも多くの日子を経ざる爲めか格別大出油の報を齎すには至らなかつた。

高田商會

高田商會は從來石油界には多少の因縁あり。其態度即かず離れずといふ程度にあつて、近年少しく熱を高め、青森縣東津輕郡蟹田村、新潟縣三島郡大津村横原、刈羽郡北條村等に開掘した。此高田商會の事業に關し、五年二月八日の中外商業新報は左の如く報じて居る。

高田商會は、今回新潟縣下及び青森縣下に於て石油事業に着手することとなり、準備を了せり。尤も同商會は從來とても新潟縣下方面に於て、數度鑿井を試みたる事あれば、全く新たな企といふに非ず、云はゞ事業の繼續延長とも觀るべけれど、從來の如く消極的のものにあらずして積極的に本業の經營を思ひ立ち即ち企業地をも新潟に止めず青森方面に手を擴ぐる事となりしものゝ如し。村井氏と云ひ、淺野氏と云ひ、久原氏と云ひ、富豪が揃つて石油事業に着手せるは注目すべき現象なり。

新石油會社續々起る

秋田石油鑛業會社

歐洲時局の影響を受け、内地の産業好況となるに連れ、各方面に新事業起るに至つたが、我石油界に於ても其例に洩れず、大正五年の新春に發企の名乗りを揚げたものは、秋田石油鑛業會社であつた。其資本金總額を二百萬圓とし、發起者の主なる者は、井上徳三郎、今西林三郎、長谷川銚五郎、土居剛吉郎、大塚惟明、太田光熙、神田鑛藏、武内作平、南波禮吉、柳廣藏、木村靜幽、大塚勝太郎、藤本清兵衛、七里清介、宮崎敬介等の諸氏で其創立委員長は肝付兼行男であつた。同社は秋田縣人三浦兼藏氏及び畠山雄三氏の所有する秋田縣南秋田郡及び仙北郡の鑛區約五百萬坪を買收して事業を經營するといふに在りて、此株式募集は一月の下旬に發表せられ、其申込は募集額の八倍に達し。四月十三日大阪商業會議所に於て創立總會を開き、取締役に阿部浩、千葉胤義、香野藏治、三羽則文、太田政之、森本常太郎、三浦兼藏の七氏を、監査役に大島甚三、渡邊昇、秋山武兵衛、山島文次郎、芦田作次郎の五氏、相談役に肝付兼行、山本辰六郎、渡邊藤吉の三氏を挙げ、専務には香野氏、支配人には三羽氏推されて成立を告げた。斯くて同社は秋田縣南秋田郡に於て開掘したが、數ヶ月を経るも成功に至らず、多少頓挫の傾きある所へ大正六年の

春、専務取締役香野藏治氏が、同社の資金拾餘萬圓を私消したる不祥事件暴露し、發企當時の好景氣に比し、甚だ不振に陥つた。

大日本石油鑛業會社

大正五年十月十七日の京阪諸新聞紙上に大日本石油會社の株式募集廣告が現はれた。同社は資本總額を五百萬圓と定め、株式總數十萬株の内、九萬三千株は發起人及び贊成人之を引受け、七千株を公募するのであつて、發起人總代は男爵伊東義五郎、廣瀬滿正、渡邊藤吉の三氏であつたが、同社の事業經營方針は、未だ試掘を経ざる鑛區に多額の資金を投じて買收することよりも、現に鑿井探油しつゝ鑛區を買收するに在りて、其經營健實を標榜し、事實に於て豐礦石油新日本石油などいふ既設會社を買收した。同社は創立總會に於て、其名稱を大日本石油鑛業株式會社と改めた。

其他の計畫

其他大正五年に發企を計畫せられ、多少世間の注目を惹いたものに、資本金三百萬圓の出羽石油會社、同六百萬圓の帝國石油會社あるも、此稿を草するまでには正式の成立を見るに至らなかつた。

歐洲戰爭の影響を受けて油價昂騰す

久しく沈滞して一定の値段を保つて居た石油製品は、大正四年十二月、先づ燈油五錢、輕油十錢の値上げをしたるに火蓋を切り、爾來値上げに次ぐに値上げを以てする状態となり、大正五年の春迄續いて、各製品共三割前後の騰貴を見た。これは歐洲戰爭の影響を受け、容器及び精製用藥品の騰貴、船腹の不足其他に原因するのである。

日本賣田の兩社奮勵す

化學研究所

戦近歐洲戰爭の影響に鑑み、日本石油會社は、前後して化學研究所を起した。日本石油會社は新潟縣柏崎町に置き、舊本社建物の内部を改築して之に充て工學士杉卯七氏を主任技師とし、其他工學士松井穰、同中村雄七郎氏等をして各々部門を分ちて研究に當らしむることしたる外、米國よりロスアンゼルス市ターナー製油所の技師長ウィリアム、ロリソン氏

を聘して、邦人技師と協力研究せしむる事にし、寶田石油亦長岡に化學研究所を起した。

技師遣外

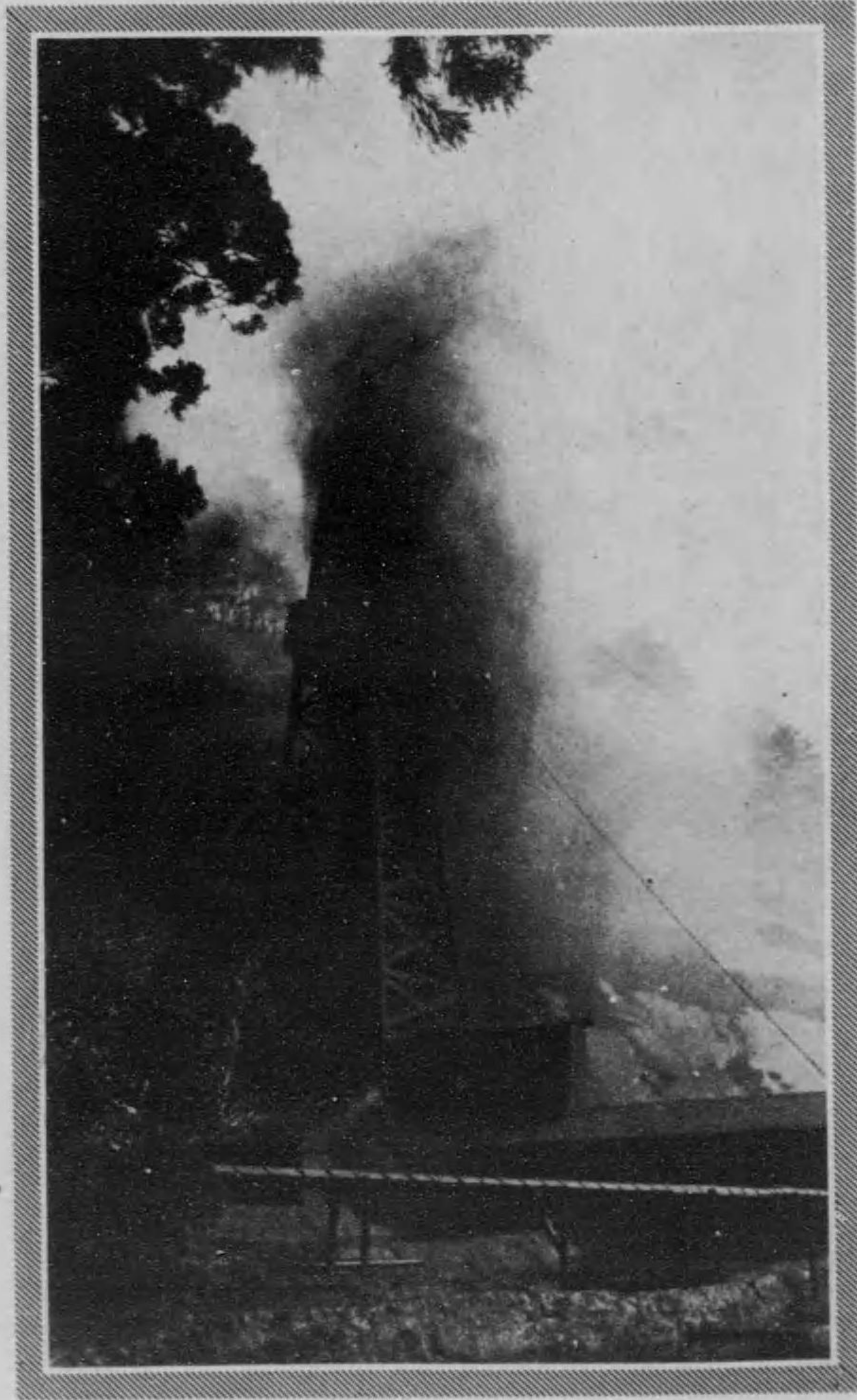
從來屢々技師を海外に特派し、石油事業の調査をなさしめ、本邦の石油事業に貢献する所少なからざりし日本石油會社は、大正五年又々監事伊藤一隆、鑿井技師山本金次郎、同松澤傳太郎、製油技師松井穰の四氏を米國加州に特派し、視察調査せしめた。又寶田石油會社にても鑿井技師山田文慈、製油技師吉山虎市の兩氏を米國に派遣することに決したが、山田氏は都合あつて之を辭し、鑿井技師井上可吉氏代りて渡米することとなつた。

日石教習生養成

石油鑛夫は、機械の操縦其他卓拔なる技能を要し、斷出しのものには、到底間に合はざるのみならず、技術未熟の者をして携はらしむる時は、却て大害あるを以て日本石油會社にては新に鑛夫教習生規程を設け、西山油田宮川鑛場に教習所を置き、大正五年四月十五日、第一回授業を開始し、三ヶ月にして講習を了り、修業者を各鑛場に配置したが、其成績は豫想以上に良好なので、同社は年々之を繰返すことにして居る。

各地試掘

各石油兆候地に對し、從來の試掘の手を緩めざりし日本石油會社は、大正五年に



日石大四面號井の大噴油

至り特に之に力を注いだ。同年に於ける其試掘地は、北海道留萌、秋田縣澤井、船川、山形縣藏岡、新潟縣馬寄、大面、雲出、七日市深層、平井、松代、柿崎、金谷、臺灣六里ヶ濱等の十數ヶ所であつた。又寶田石油會社も此歲試掘に力を入れ、從來の秋田縣小友、山形縣平澤の外新に新潟縣南蒲原郡庄川、三島郡宮本、東頸城郡須川の三ヶ所を一時に開掘した。

現代石油業(追加)

『日本石油史』再版の改訂成りたる日、突如大面大噴油の報あり。恰も是れ初版『日本石油史』の稿成りたる時、黒川大噴油の報の至りしと同じ。仍て吉例により追加として之を左に掲ぐ。

大面四號の大噴油

四號井工程

大正六年三月三十日大噴油をなし、越後噴油史上に新記録を留めたる日本石油會社大面四號井は、前年の五月成功して試掘地としては珍らしき結果を見たる二號井の東方約八十間の所に在り、槽は高さ十八間のロータリー綱掘混用装置、口徑は十四吋、鑿司は技手酒井平吉、副鑿司は技手補瀧澤開知の兩氏にして、大正五年十二月二十七日の開坑に係り、掘鑿總

て順調に進み、大正六年二月の下旬、深度四百七十五間にして、セメント水止を施行し、夫より綱掘装置に改め、四百八十間前後にて油層に入りしも、尙ほ掘進を繼續すること十間、三月三十日午前六時、少量の瓦斯に油氣を交へて噴き始めた。

越後空前の大噴油

従業員は此噴出しを兆候に止まるべしと思ひ、尙作業を繼續する中、俄然強烈なる瓦斯は、山野も鳴動するばかりの音響を發して一大噴油をし初め刻一油刻噴力を増し、十八間槽の途中に垂下しあるブロックに突當りて多量の油、飛沫となりて四邊に飛散する。其光景壯絶凄絶であつたが、暫時にして此飛散する油は、周圍十町四面の田面に湛へて宛然油の海と化した。従業員は之を抑制せんと試みたけれど、何分にも瓦斯の力猛烈にして、油と共に岩片土砂を吹上げるので、危険にて到底近づく事ができぬので、已むを得ず、全鑛場の作業を休止して、原油の流失を防ぐことに努力し、土タンクを急造して之を堰止め、尙ポンプを使用して既設の六千石鐵槽に移したが、此噴油は三十日の午前六時より間斷なく噴出し、午後に至り、勢ひ少しく衰へ、夜半頃一寸停止したるも再び噴油、一夜を徹して翌三十一日午前八時に至り漸く停止した。此停止

は坑底より吹上げる土砂岩片の爲め坑内埋もれたる爲めなので、鑛場員は此機會を利用して、ケーシングヘッドを取付、パイプを布設する等の作業に努めた。

日産五千石以上

噴油停止の後、四邊を檢すれば、槽は所々禿破壊され、エレベーターの弦ブツク及びブロック等は吹上げる土砂の爲に嘗められて用をなさず、ケーシングラインは、幾つにも切々となり、槽下は約三尺、小砂を以て埋立てられ一時は手の着けやうもなかつたといふ。斯くて同社が鐵タンクに收容した原油は三千四百石、タンクカーを以て柏崎製油所へ送りし分六百石、土タンクより集めたる分一千石、其他四方へ飛散せし分を合すれば、七八千石にも及んで居るであらう。越後由來噴油の記録に富むも、西山方面にては六七百石を最多とし、新津方面にては一千餘石を最多として居り、他の油田は遙に之に下つて居るのであるが、此大面の大噴油は日産五千石以上にして越後に於ては飛離れた巨井であるのみならず、大正三年に現はれた秋田黒川の五號井に次ぐのである。同社にては其埋没に對し、浚渫の手配をなしたるに、四月九日午後より再び噴油を開始したが、今後は總て應急準備成りたる後なれば、日々必要に應じたる量を噴かしむることにした。

日本石油史(終)

日本石油史(終)の本文は、石油の発見、採掘、加工、輸送、消費の歴史を詳細に記述している。石油の発見は、明治初期に始まり、戦後には大規模な採掘が行われた。石油の加工技術も進歩し、様々な石油製品が生産されるようになった。輸送手段も、船舶からパイプラインへと変化した。消費面では、自動車や航空機の普及により、石油の需要が急激に増加した。本書は、石油産業の発展とその社会への影響を詳しく解説している。

索引

石油の発見及其名稱

- 燃える水 三
- 献上地 四一八
- 北海道に於ける発見の由來 三三二—三三三
- 秋田に於ける発見の由來 三六四—三六六
- 新津に於ける発見の由來 八一〇
- 如法寺瓦斯の発見 三六一—元
- 地獄谷瓦斯の発見 三〇〇、三〇一
- 頸城に於ける発見の由來 二〇一—二
- 遠州に於ける発見の由來 三〇〇
- 臺灣に於ける発見の由來 三六八、三六九

石油の用途

- 古來の名稱「くさうづ」 五
- 石油、石漆、石炭油 三六—六
- 石油利用の徑路 二、三、二、三
- 燈火用としての石油 三、五、五
- 燃料としての重油 一五八—一五八、三〇九、三三〇、三三三、三六六
- 醫藥原料としての石油 四一四、四五三
- 殺蟲劑としての新津原油 二六七
- 石蠟製造 四七三
- 海外調査
 - 大島圭介氏の視察 六
 - 山口權三郎氏の視察 二二、二四
 - 内藤久寛、三島徳藏氏等の歐

地質調査

- 米視察 一七三—一七六
- 笹村萬藏氏の視察 二三五
- 山田又七、倉田久三郎氏等の視察 三三
- 内藤久寛氏再度の渡米 三八—三三
- 伊藤一隆氏等の渡米 四三、四八、四九
- 松方乙彦氏の歐米視察 四四八
- 舊幕時代の調査
 - 米人シンクロートンの越後黒川油田調査 七七八〇
 - 米人ハレーの越後油田調査 六
 - 米人ライマンの本邦諸油田調査 六九—七五、九七、九八
 - 大塚専一氏の支那油田調査 四一七

油田

古き石油地	四一四	柄目木八〇〇、四一六、四二〇、四二四	西山油田及其附近	一九一八、一九二一、一九二二、一九二五、一九二七、一九二九、一九三〇、一九三六、四四四	
北海道油田	三三三、三三三、三三三、三三三、三三三、三三三	粗朶山	一九七	妙法寺	四一六、一九
秋田油田	三六四、三六七、四〇〇、四〇四、四七六、四七七、四八三、四八五	小口	一七二、一七二、二七〇	宮川後谷	一六五、三六二、三八四
旭川(泉、濁川)	三六七、四〇〇	朝日	三七〇、二八四	伊毛	三二二、三七七、四五一、四二七
黒川	三六七、四五〇、四六四、四七六、四七七	金津	九九、二八九、二九〇	鎌田	一六九、一八〇、三三七
槻の木	四八四	大面油田	四八二、四八三、四九三、四九五	長嶺	一七〇、三三七
浦山	四八五	東山油田	二〇一、二二三、二三四、二五四、二六八、二五七、二八一、四〇〇、二七九、二九四	瀧谷	四三三、四三三
越後		魚沼油田	二八〇、二八二、二九一、二九二	石黒	二九七
黒川及岩船油田	一六、七六、一八〇、二九八	三島油田	二八〇、二八二、二九一、二九二	頸城油田	一〇一、二二、四四、四四、四四、二七三、二七六、二九五、二九七
新津油田	八一〇、一九七、四三三、四三四、四三三、四三三、二八二、二九〇、四〇〇、四〇一、四〇一	尼瀨	八七、八八、一〇七、一一三、一一三、一一三、一六六、二四〇、二九三	鉢崎	二七九、二八〇
		勝見	二四〇、三三九、三三〇	郷津	二九五、三三〇、三三一
		吉水	六一八	支藤寺	一〇、二〇、二二、四〇
		七日市鳥越	一八二、一八三、四二四		

萩平	九三一九五
原	二四五、二七七
遠州油田	二九一、三〇二
臺灣油田	三八八、三九一

尼瀨	二〇五、二二三、二六六、二九三
宮川	一九六、二〇九、三八三、三八三
伊毛	四三三、四三三、四三三、四三三、四三三、四三三
鎌田	一九六、二〇九、二二〇、三三七、四四五
長嶺	一九六、二〇九、二二〇、二九四
瀧谷	四三三、四三三
頸城方面	一〇五、一九六
支藤寺	一〇五、二四四、二七六
牧	二七七

秋田に於ける最初の機械掘井	三六七
日本會社旭川五號井	四〇〇
日本會社黒川ロータリー五號井	四五〇、四五〇、四五〇、四五〇、四五〇、四五〇
越後諸油田	
蒲原及新津方面	
黒川の異人井	八〇
柄目木の火井	三一三
柄目木最初の噴油井	四二二
日本會社柄目木三號井	四三三、四三三
日本會社熊澤一號井	一九七
寶田會社小日五號井	四四七
日本會社大面四號井	四九三、四九五
如法寺の火井	二六三

坑數深度及産油量

秋田方面	四五〇、四五二、四五四、四五八、四六六、四六七
新津方面	一〇五、一九六、二四二、二四四、二七一、二七二、二六五
大面方面	四八三、四九三、四九五
東山方面	一三八、一六八、一九六、二四一、二四二
西山方面	一〇五、一六六、三三七、三三九、三三六、三三七
七日市	四一四、四一五

北海道油田	
イントル五ノ澤一號井	三〇四、三〇六
秋田油田	

主なる坑井	
北海道油田	
イントル五ノ澤一號井	三〇四、三〇六

天然瓦斯會社の大日瓦斯井 三五	日本會社尼瀨機械堀一號井 二六、二七	頸城方面
東山方面 三六	東京會社の一號井 一四七	東洋會社鉢崎二號井 二八〇
大平會社加坪手掘三號井 一五三、一五五	西山方面	片田初造氏郷津一號井 三三〇
東山に於ける最初の機械堀 一五三、一五五	日本會社宮川一號井 一六六	長岡興業會社北野一號井 三三三
井 一六三、一六四	日本會社宮川廿六號井 一六六	日本會社原二號井 三四五
魚沼方面	日本會社伊毛五十五號井 一四〇、一四一	鑿井機及其技術
小千谷會社時水二號井 二六一	日本會社伊毛七十一號井 一四六、一四七	石坂周造氏の最初輸入したる機械 八五、一八六
東源會社山谷一號井 二九、三〇、三三	石坂周造氏鎌田三號井 一九、二〇、二一	内國製の鑿井機械 六六、一四三、一六七
地獄谷の火井 三〇、三三	日本會社長嶺一號井 一七〇	日本石油會社最初輸入の機械 二六、一三六
五日町の火井 三〇	長嶺組合長嶺一號井 一八〇	ハース氏案出のロータリー 二八、二八四
尼瀨方面	寶田會社入和田ロータリー 一四七	イントル社試用のロータリー 三〇八
加藤の濱井戸 一〇八、一〇九	七號井 一四七	日本會社輸入のロータリー 三〇八
日本會社最初の手堀井 一九、三〇	日本會社瀧谷一號井 一四四	

マニラロープとワイヤーケープ 四三、四三、四四	天然瓦斯	牛田村の製油所 四
燃發藥使用 三〇八	七不思議の「火井」 二六、二七	日本精製石油會社 五
共同鑿井と受負掘	鎌田伊毛の大瓦斯井 三八、三九、四〇、四三	越後製油會社 一四九、一五〇
妙法寺に於ける共同鑿井 一五、一六	天然瓦斯長距離引用 三八	淺野製油所 一八九
新津に於ける共同井 九、二八	天然瓦斯採取の嚆矢 三六	日本石油會社柏崎製油所 一九八
新津に於ける受負掘 二七	瓦斯機關使用 三〇七	イントル會社直江津製油所 三〇、三〇九
鐵業用達會社 二八	天然瓦斯より揮發油 四七	株式會社長岡製油所 三三、三五、五二
頸城に於ける受負掘 三〇六、三〇七	製油法及製油所	南北石油會社程ヶ谷製油所 三八、三九
政府及公共團體の試掘	創始時代の製油 四〇、四一、四二、四五	日本石油會社秋田製油所 三八、四七、四七八
工部省の赤田試掘 六、六	製油技術及設備 一五〇、一五五、一五六、一八九	ライジングサン西戸崎製油所 三九、四〇、四七
石油調査會の秋田試掘 三六	製油所濫設及其淘汰 三七一、三三〇、五一	日本石油會社北海道製油所 四〇
	主なる製油所 一九〇、二五二、三五三	

化學研究所

四九一

送油及貯油設備

鐵管線

- 頸城油田荻平山麓間 九五
- 東山油田長岡間 一四七、一四八、一六四
- 西山油田柏崎間 一九三
- 頸城油田高田間 二二四
- 西山油田直江津間 二二四
- 越後各所送油鐵管線 二二四
- 新津油田金津矢代田間 二九〇
- 碓氷峠送油鐵管線 三五、三六
- 秋田油田旭川土崎間 三八、四八、四九
- 秋田油田黒川土崎間 三八
- 三島油田七市米迎寺間 四二五

同島越川西間
大面油田帶鐵間
北海道石狩油田輕川間

四二五
四八三
四四〇

タンク

タンクカー

油槽船

油槽所

北越鐵道の全通と石油輸送

越後鐵道の全通と西山油田

販賣機關

國油共同販賣所の組織

國油共同販賣所の分離

日本石油會社の販賣店

- 一八四、一八五、二三四
- 一九三、一九四、二四四、四七三
- 七四三、四七三、二五四、二五五
- 一八五、一八七
- 四四五
- 三五、三六
- 三五、三六
- 三五、三六
- 三四六
- 三四六
- 三四六

淺野及び寶扇商會

一八七、一八九、二六四

スタンダードの販賣機關

五九、一六〇、二二一、三三〇、三三一

サミュエル商會の販賣機關

二二二

外國商館

六〇、一五九

蝙蝠商標

一一六

製品の販路及評判

販路開拓及び其苦心 〇一、四四、二〇四、二〇五、二二二、二二三、二五五

初期に於ける越後油の販路

五〇、五一

重油を放棄す

一五八、一五七

内油の評判

三四五

銀行家と石油業

一五〇

石油相場及其協定

明治初年の油價及運賃

五三、五四、五五

明治初年の外油相場

五九、六〇

重油及原油値段

一七、一七、一七、二六、三九、三二〇

石油市況

三〇九、三三三、三三五、三三三、三四、三四一、三四七、四九

相場の協定と破裂

四〇一、四一〇、四八一、四五〇

外油輸入

附原油輸入税引上問題

- 初期に於ける輸入額及種類 五、六一
- 主なる外油輸入者 一五九
- スタンダード 一五八、一六〇、二二、三三〇、三二

サミュエル、サミュエル商會

二五、三三

露油及ホルネオ油

三四一、三三七、三三

原油輸入税引上問題

三三、三三、三三、三三

運上金試験税及關稅

柄目木に於ける運上金

三

吉水に於ける運上金

三

妙法寺に於ける運上金

五

頸城に於ける運上金

三三、三六

試験課税

二六、二七

關稅の沿革

三〇七

石油輸入税率及其引上

二七、二七、三二、三三

石油界の榮譽

明治天皇と石油業 九三、九四、一三三、三六三、三六三

東宮殿下の石油地行啓 二五八、二六一

各宮殿下の石油地御視察 四七三、四七四、四八五、四八六

黒川大噴油狀況奏聞 四七三、四七九

石油業者へ縁綬褒賞下賜 三九三、三九六

大正博覽會 四六九、四七一

同業組合及新聞雜誌

長岡鐵業會 二六八、二六九

刈羽鐵業會 一九四

日本鐵業協會 二二二

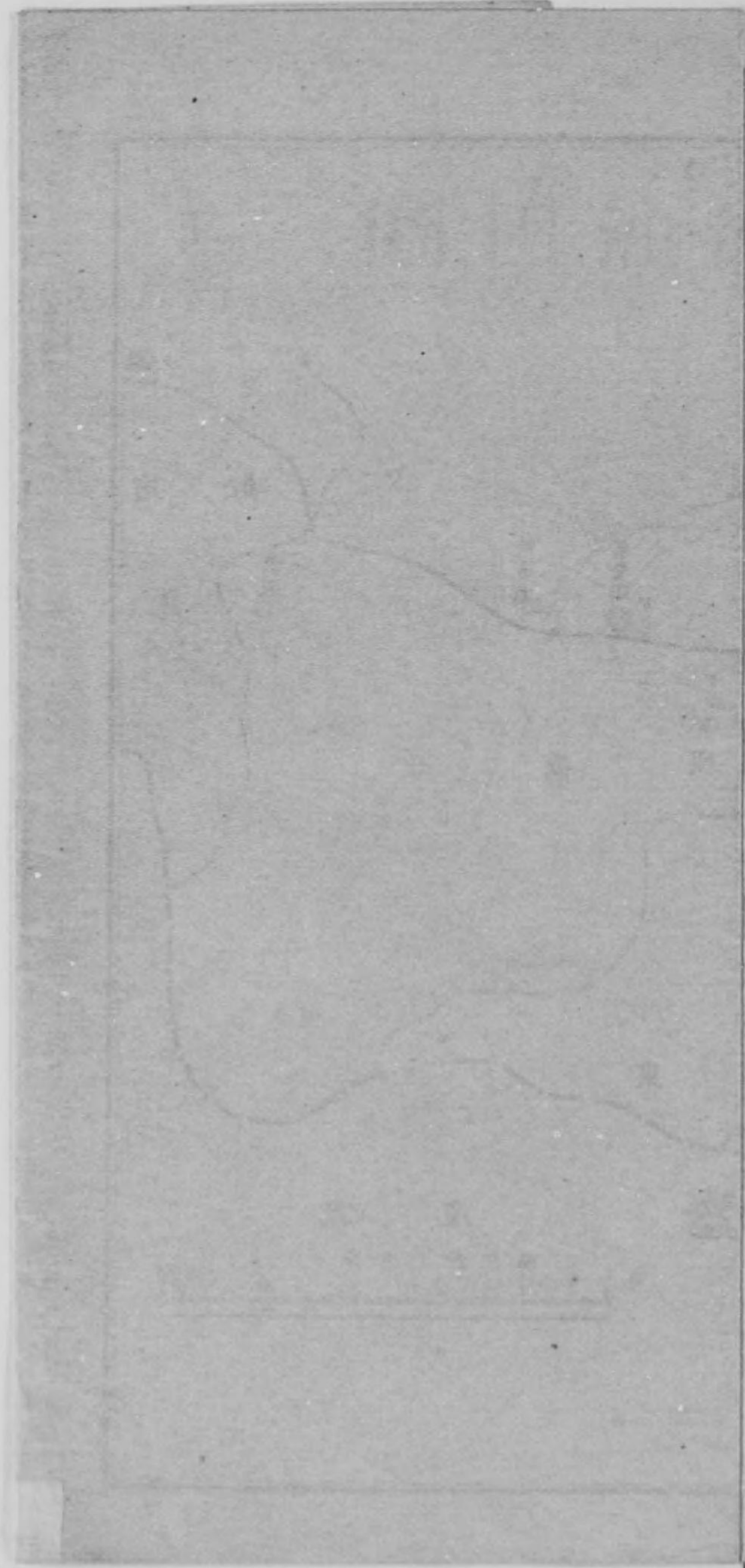
中蒲原石油組合 二七二

日本の石油		日本の石油	
日本石油	二六六	東洋石油會社	四三三、二八〇
會社及組合		東西石油會社	三八〇
インドル石油會社	二七―三四、二五〇、二五二、三三三、三三六、三三七、三八八、三三九、三七一、三五九、四三六	東源石油會社	二九二、一九三
石動油坑會社	一三三	大平會社	一五二、一五五
日八組合	一六―一三六	太平石油會社	二九、三〇
八扇會	一八七	大日本石油業會社	四九〇
日本石油會社	二二―二五、二六―二八、二四二―四三、四五、一六五―一七〇、一九七、一〇五、一六八、一九九、二九〇、三〇二、三八八、三〇〇、三〇一、三〇二、三〇三、三〇四、三〇五、三〇六、三〇七、三〇八、三〇九、三一一、三一二、三二一、三二二、三二九、四〇二、四二二、四二五、四三五―四六、四三〇―四四一、四四四、	寶扇會社	三六四
		東京會社	四三三、一六六
		東京石油會社	一四三、二八〇
		東西石油會社	三八〇
		東源石油會社	二九二、一九三
		大平會社	一五二、一五五
		太平石油會社	二九、三〇
		大日本石油業會社	四九〇
		高田商會	四九〇
		大阪會社	四三二
		長野石炭油會社	八二、八四、一五九
		長岡製油所	三三、三五、三三二
		長岡興業會社	三三
		長岡石油會社	三三
		長岡鐵管會社	一四八
		北越石油會社	一三〇
		北陽會	一一〇
		新瀨鐵工所	一六七、一六八、三〇〇、四三二
		日本硫曹株式會社	三六二
		日本精製石油會社	三六五
		日寶石油會社	二〇六
		日本油坑會社	一六三
		日本天然瓦斯會社	三六六
		四四五、四八八、四九〇―四六四、四七六、四七三、四七六、四七八、四八一―四八三、四九一―四九六	

長岡鐵工所	四七―四八〇	藏王石油會社	一六、一六三、一九三、一九五、二六四、二六八
南北石油會社	三三三、三八〇―三八三、三九九、三五二、三五三	サミユル商會	二六、三三三―三三七、三三三
久原礦業株式會社	四九九	ミカド組	三〇七
山本油坑會社	三二二	シエル、エンド、ダツチ會社	三五、三六、四五―四二〇
礦業用達會社	二六八	スタンダード會社	一五八―一六〇、二五、二六、三三、三〇、三一、四〇―四一〇
郷津會社	一一二	未廣組	三〇七
越後會社	二四三	諸會社の興廢	一一、一六一、一六三、二〇五、二〇六、二〇八―二一〇、三三三、三三三
越後製油會社	一四九、一五〇	内國二大會社合併問題	四三―四三五
出羽石油會社	四九	株式賣買及其相場	二九
帝國石油會社	四〇	石油株初期の取引	二九
淺野北越石油部	一八七―一八九		
尼瀨會社	二二二		
愛國石油鑿井會社	三三		
秋田石油鑿業會社	四九		
		女仲間人	一三九―一四一
		大平株暴騰	一五三、一五四
		石油株暴落	一七三、三六―三九七
		石油株暴騰	三四〇、四九一―四九三
		一株の額面一千圓の株式	二二五
		人物	
		石坂周造	一一九、一八〇、一九、一九二、三〇―三〇二、三三五
		石坂宗之助	四八
		池田寅治郎	三九九
		伊藤一隆	四三、四三、四八、四八、四九
		井上馨	九四
		ハス	一五、一八、二八
		林寛明	一六三

橋本圭三郎	四八〇
本間新作	二二四
チヤイルズ	二五〇
大島圭介	七六
片田初造	三〇〇、三三二
ダン(イントル)	三七一、三三〇、三五三
高野 殺	三五五、三六六
高野新一	二五三
築山鏘太郎	二五六
内藤久寛	二二二、二二六、二七二、二九一、 三八一、三三三、三三七、三三八、三九〇
中野貫一	九八、一〇二、二九〇、三六六
中川儀右衛門	四〇
中川嘉兵衛	六三、六四
ライマン	九一、九二
ライレ	八七、八八
村井吉兵衛	三九七、三九九
殖栗順平	二二
渡邊 忠	一三〇、三三七、三四〇
渡邊 渡	一三三
渡邊 藤吉	二六、三九七、三九九、四七九
渡邊貞助	四三二
鷺田種徳	一七一、二七二
加藤直重	一〇八、一一〇
カ一タ	三五三、三五九
柿岡源十郎	三六五
田代虎二郎	四四
タムソン	八三、八九、九一
ダン(技師)	八四、九一
瀧澤安之助	八四、九一、九六
田代 孝	一五七
大隈重信	三三、三五、三四、四六、 二四六、二四九、四二、四三
大塚専一	四二七
大繩久悠	三六五
倉田久三郎	二二、三三、三三三
久須美秀三郎	六五、六六
桑原福次郎	一六〇
隈本榮一郎	一六〇
山口權三郎	一一二、二四、二五、二四
山口政治	一三六
山口達太郎	一六七
山田又七	二二六
山岡鐵舟	一三、三三、三五、四六、 八三

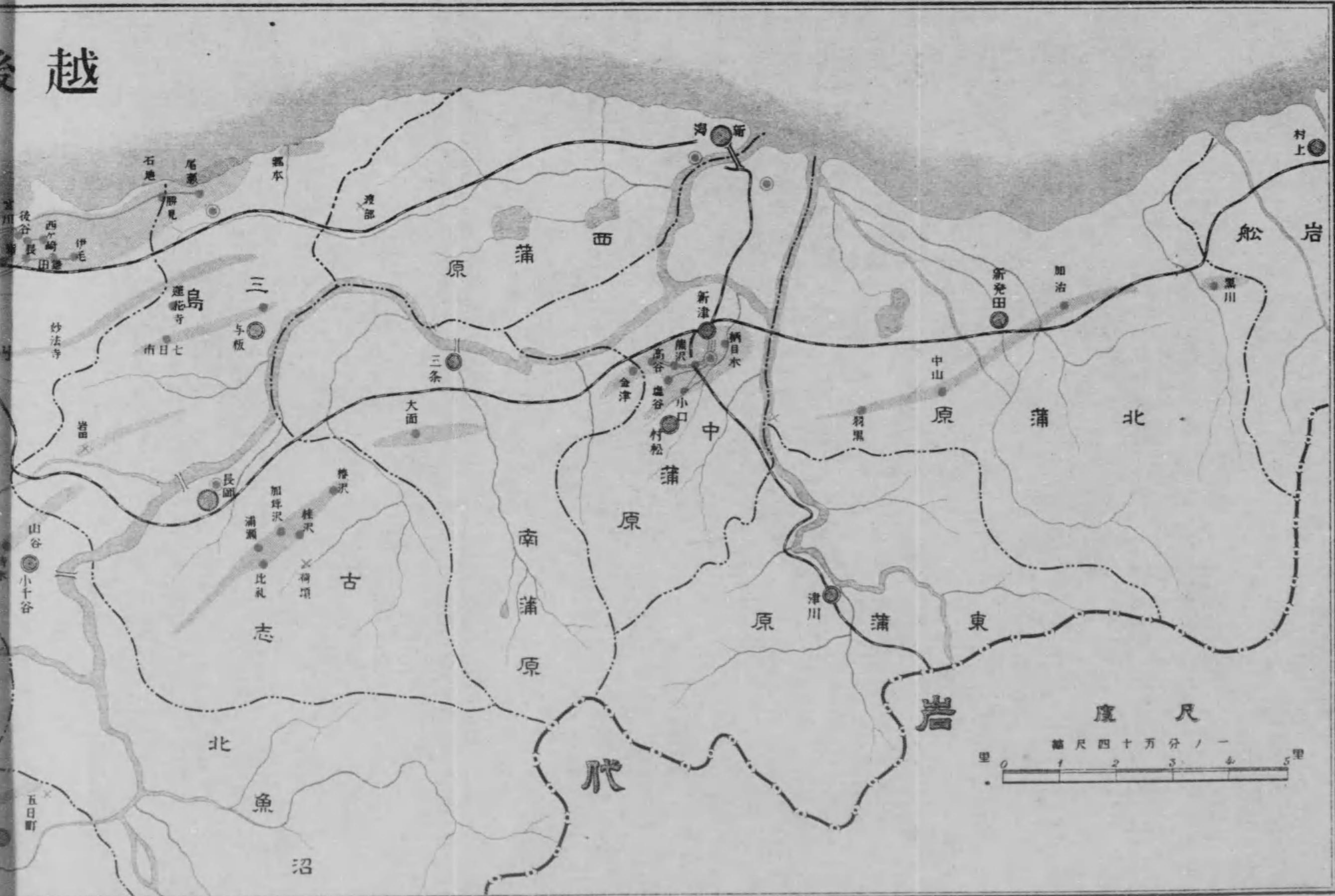
牧口莊三郎	一一四
増田増藏	一六〇
松原重榮	三九七、三九九
松方乙彦	四四八
コツプマン	二八、三〇、三五、三五七
小坂松五郎	二二
小林久平	一六
近藤彦七	一五、一六、一八〇
福島甲子三	四六
近藤會次郎	一八九
後藤新平	四三
寺田洪一	一八八
テブル	一四
アベ	九三
安部幸兵衛	一六〇
笹村萬藏	三三五
喜齋(蘭醫)	四一、四三
鬼頭悌二郎	二四
岸田吟香	六三、六四
岸 宇吉	二七、二九
木村清三郎	二六六
三島徳藏	一七、一七九、二六八
島田龍齋	八二
シンクロートン	七、七
平野安之丞	七
廣瀬貞五郎	一三六、一三九、一九四
平澤繁太郎	二五三
森岡昌純	一六一
ステワード	一四



索引終

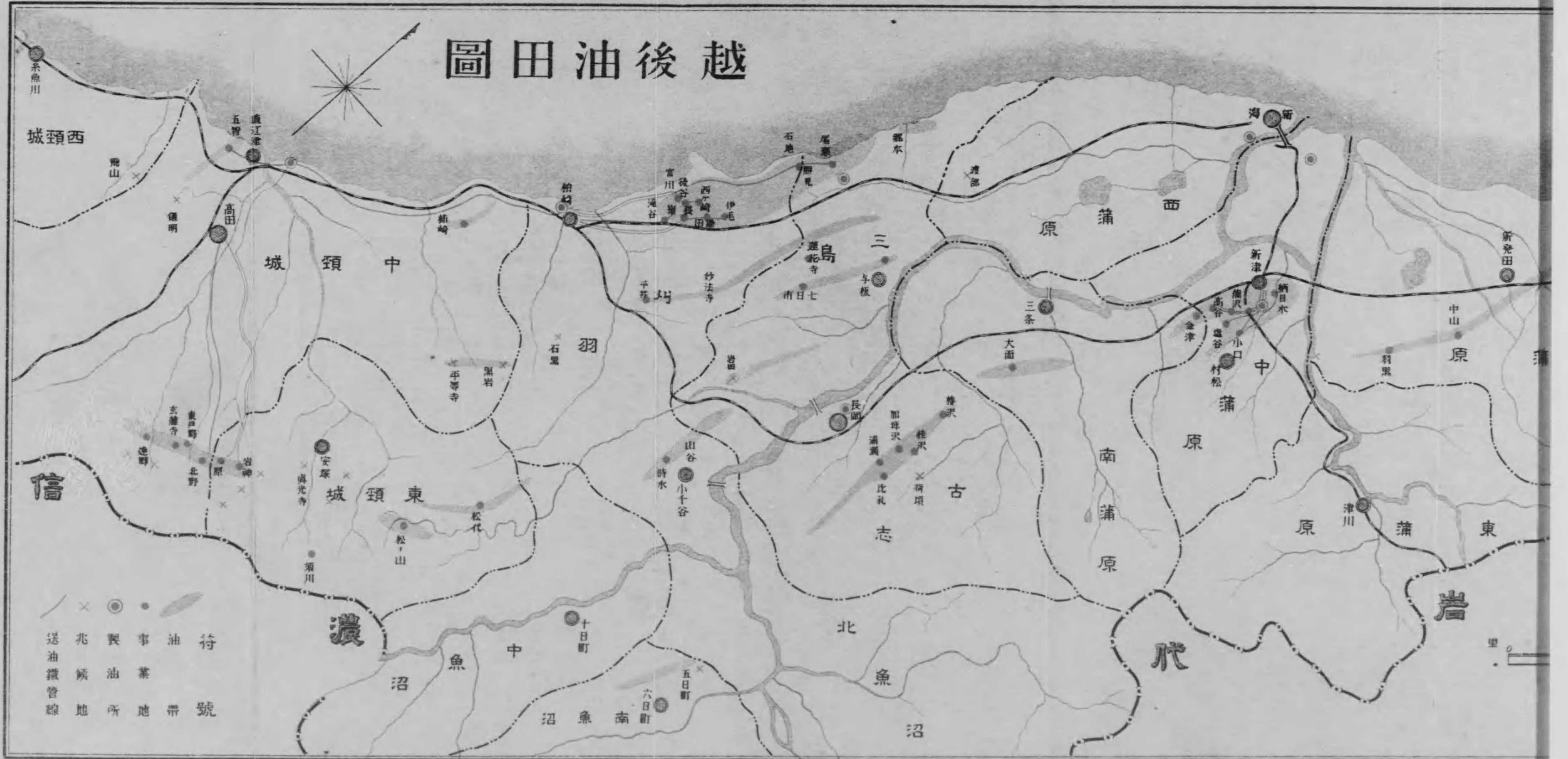
日本石油史……索引
一、緒言
二、石油の発見と採掘
三、石油の輸送と貯蔵
四、石油の消費と産業
五、石油と環境
六、石油と国際関係
七、石油と日本の経済
八、石油と日本の文化
九、石油と日本の未来
十、おわりに

越



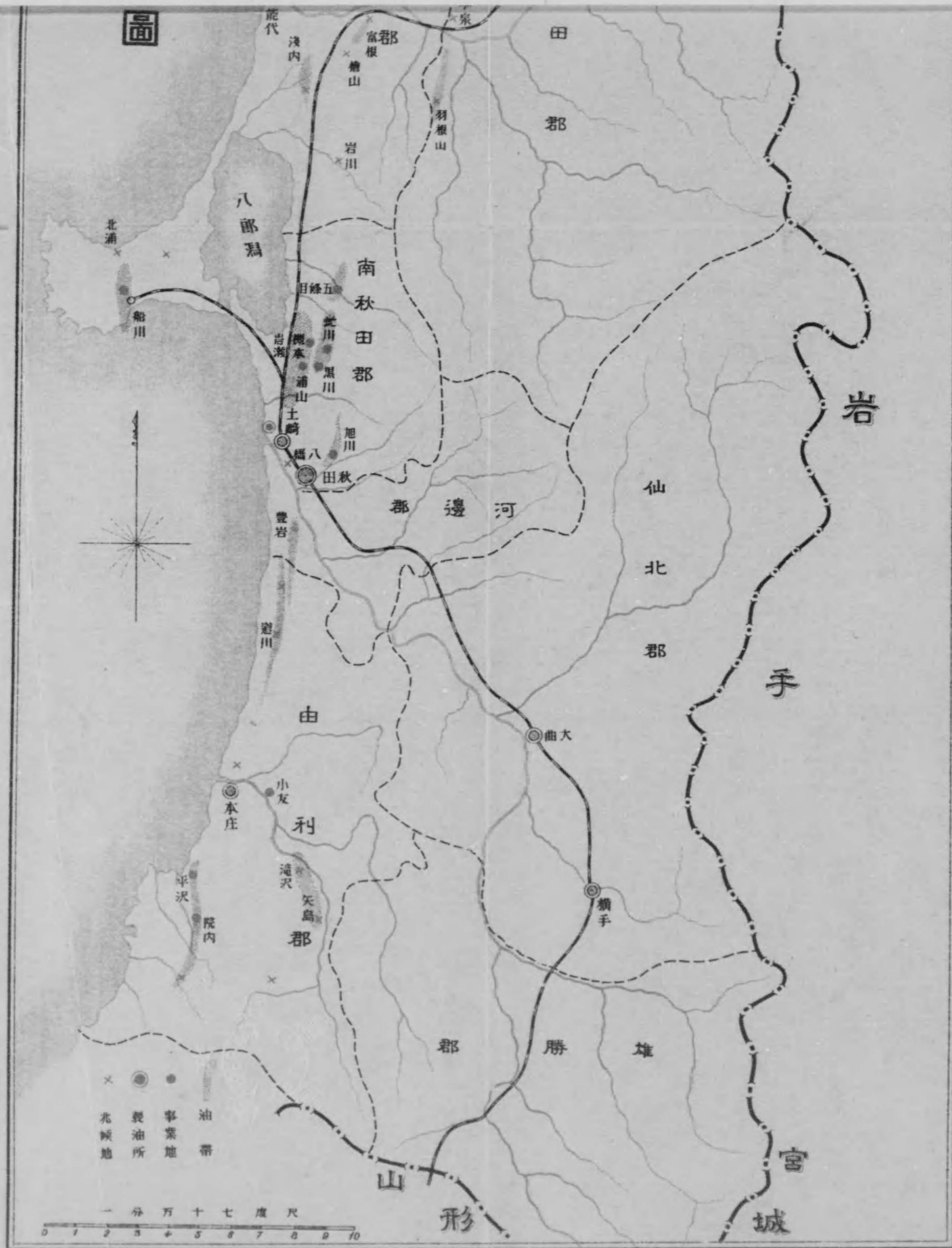
度尺
縮尺四十分の一
里 0 1 2 3 4 5

越後油田圖



秋田油田圖





大正參年八月二十三日印刷
 大正參年八月二十五日發行
 大正六年四月二十八日全發行
 大正六年五月一日發行

定價 壹圓參拾

日本石油株式會社代表者
 伊藤 隆
 一 東京市麹町區有樂町一丁目一番地

中村 竹四郎
 一 東京市京橋區南鍋町一丁目二番地
 大參社印刷代理部
 一 東京市京橋區南鍋町一丁目二番地



編輯者 伊藤 隆
 印刷者 中村 竹四郎
 印刷所 大參社印刷代理部

發行所
 發賣所

東京市麹町區有樂町一丁目一番地
 東京市京橋區出雲町一番地

日本石油株式會社
 新橋堂書店

8.8.25

Sl. 278

7^{va}

~~348~~ 568
~~1971~~ N771

終

